

検証

吉田調書

①

東京電力福島第1原発1号機が津波で全交流電源喪失してから丸1日が経過した2011年3月12日午後3時36分、1号機原子炉建屋が水素爆発した。吉田昌郎元所長は聴取結果書の中で、建屋の水素爆発を「大きな盲点」と振り返っている。

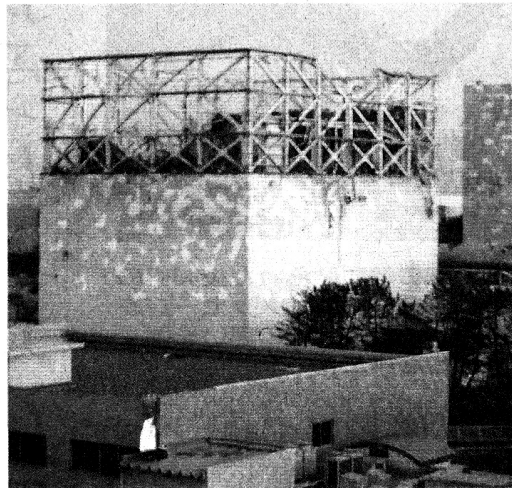
「爆発をどのようにして把握したか。」

「免震重要棟から1号機が全然見えないんですね。線量が高いですから誰も外に行って見えない。そのときに、下から突き上げるような、非常に短時間のどんという振動がありましたものですから、また地震だという認識でおりました」

爆発現場周辺には、電源復旧のための仮設ケーブル敷設や原子炉注水のため、何人もの作業

## 想定なかった水素爆発

# 「原子力屋の盲点」



水素爆発で上部が崩壊した東京電力福島第1原発1号機の原子炉建屋  
=2011年3月12日(東京電力提供)

員がいた。

「まずは退避なんです。安否確認です。一番近くにいたうちの保全担当が腕を折って帰ってきたんですね。そいつにどうなっているんだと聞いたら、もう大変ですよという話が入ってきた」

この爆発で、陸上自衛隊の消防車に同乗して注水現場に向かっていた東電自衛消防隊長

(当時)の男性(54)が、飛んできた鉄骨で左腕を骨折した。注水に向けた作業は中断し、仮設ケーブルもがれきで傷ついて電源復旧作業は振り出しに戻ってしまった。

「一気に希望がしぼんでしまったというか、瞬間的にどうにかしないといかぬということなりました」

「次のステップとして一番怖

いのは格納容器が爆発するんじゃないかということになりますけれども、格納容器圧力は爆発前後で大きく変わっていないわけですね。人をどうするかという判断、この一連の操作の中で一番悩ましかったんですけれども、退避させるのと、何か作業をしないと次のステップに行かないということの折り合いの中で判断していったと」

爆発の原因が核燃料の溶融に伴って発生した水素が原因と分かるのは後のことだ。吉田氏は、誰も水素の影響を意識していなかったことを大きな反省点に挙げています。

「免震重要棟内や本店から危険性の指摘は特になかったか。」

「全くなかったです」

放射線物質が漏れるのに、水素が漏れないというのは論理的におかしい。

「われわれは思い込みが強いんですけれども、格納容器の爆発をすくく気にしたわけです。」

原子炉建屋の一番上が覆われていて、そこに水素、酸素がたまっているところまで思いが至っていない」

「事故想定の中に入っていないかったというのは、原子力屋の盲点、ものすごい大きな盲点」

「今後のために徹底的に考えないといけない。」

「今回のものを設計にどう生かすかというところが一番重要だと思っ、これからの国が原子力を続けられるかどうか知りませんけれども、続けられるとするのであればですね」

◇

炉心溶融して次々と爆発する原子炉建屋、上昇する放射線量。絶望的な状況が続く中、事故対応の陣頭指揮を執った吉田氏は何を語ったのか。政府事故調の「吉田調書」に残された証言を追った。